

大地協ニュース

大地協ニュース復刊 第12号

セツルの家・特集号

セツルの家での大切な思い出

毎年、数回、セツルの家を訪れる。この場所は自分にとって、楽しい、懐かしい場所だけでなく、仕事を行う上で初心に立ち戻される場所である。

入職して1年目、がむしゃらに日常の保育に取り組みながらも、学生時代、あまり保育について学んできてなかったこともあり、全ての事が大きな壁となり、押しつぶされそうになっていた時期、初めてのびわこキャンプに参加した。ど田舎出身の自分は、びわ湖湖畔のセツルの家のシチュエーションはもちろん、何より水、火と戯れる一つ一つの活動にワクワクで、子ども以上に楽しんでいたのではないのでしょうか。夜の反省会にて、主任の先生より「今日の先生よかったで！やっと先生らしさが出たんちゃう。」というご意見をいただいた。入職後、初めて「やれるかもしれない！」と思えた瞬間でした。

わかくさ保育園に異動して数年目。自らが主となり活動をすすめていく時代。湖水浴を楽しんでいる中、遠くで雷音が聞こえた。雨が近づいてくるのが目に見え、急いで本棟に避難。中に入るやいなや、バケツをひっくり返したような豪雨にみまわれた。泳げなくなり、子ども以上にショックを隠せない自分を横目に「みんなここで雨を見よう。こんな凄い雨が来てよかったなあ」「雷の後は虹が見れたりするんやで」。自分の不甲斐ない様子を見かねた当時の園長、小掠先生からの一言だった。

当時の自分は、自分たちが考えたプログラムを進めてくことが目標になっており、それが実現できる「晴=善」、「雨=悪」、のように感じていたと思う。しかしながら、晴、雨、雲、雷、風…、さまざまな事象こそ、本来の自然であり、単なる自然体験だけでなく、この場面の“ありのまま”を楽しむ事を大切にするように、との自分に対するメッセージだったと思います。言葉通り、雨が上がった後にはびわ湖に大きな虹がかかり、大喜びの子どもたちではありましたが、大きくへこんでしまった自分がいました。

この2つの話はいずれも小さな出来事ではありますが、「保育」、「人」と関わる上で、今の自分が大切にしたい点、持たなければならない視点へとつながる大切なエピソードであり、今後もこの思い出を毎年振り返りたいと思います。

わかくさ保育園 園長 蕨川 晴之

発行元：NPO 法人 大阪市地域福祉施設協議会
企画委員会 《広報宣伝部》
発行日：2021年9月 第12号
担当窓口：望之門保育園 佐伯 剛
Tel 6651-7741
Fax 6652-8841



大地協の最新☆情報は右記 →

QRコードをご覧ください。

大地協ニュースへのご感想・記事へのリクエストなど
ございましたら上記担当者までぜひご連絡ください。



『これぞ、大地協!』

7月4日(日)、セツルの家の夏季利用に向けたワークキャンプを開催しました。セツルの家を利用する施設の職員や OBOG など、総勢約 50 名の参加者が集まりセツルの家で過ごす夏を楽しみに、草刈り、飛び込み台の整備と設置、施設内の清掃等の作業を行いました。

例年に比べ OBOG の参加も多く、“これぞ、大地協!”という活気のある雰囲気の中で作業は順調に進みました。そんな活気のある雰囲気は、まるで数年前まで定期的に開催していたワークキャンプ(自然体験活動)のようで、当時一緒にワークキャンプを企画・開催していた指導員とワークキャンプを開催してきた意味や過去の活動を振り返るきっかけにもなりました。昨年から続くコロナ禍で顔を合わせる機会が減っている大地協の仲間が一堂に会し、大地協らしい雰囲気の中で過ごした時間はとても楽しく、また、たくさんのパワーをもらいました。このワークキャンプから始まった今年の夏もう終わりです。来年こそは気兼ねなくのびのびと楽しい夏が過ごせることを願いたいと思います。

やまと保育園 角中 恒介



『実は意外と〇〇な“ぞうぐみ”の子どもたち…?』

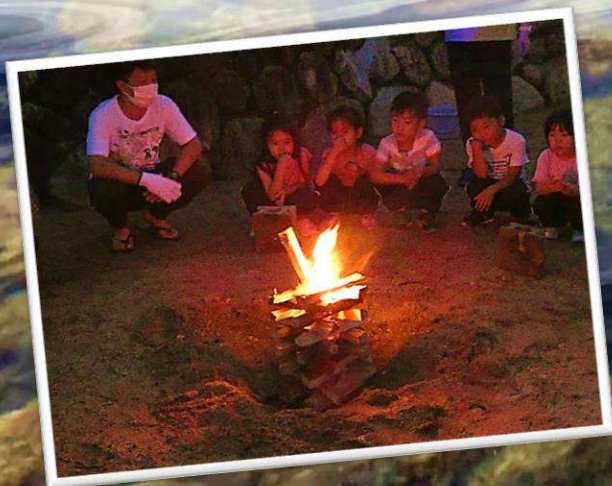
梅雨明け真近の7月12(月)~13日(火) 志賀の降水確率は90%…という予報の中での一泊保育。しかし!子どもたちの日頃の行いの良さ(!?)なのか、ほとんど雨に合うことも無く、琵琶湖での水遊び、周辺の探検、キャンプファイヤーとすべて予定通り行うことができました。

そして一番楽しみにしていた花火の時間!一泊保育の準備をしている時から「花火もするんやんな?」「めっちゃたのしみ~!」とものすごく待ちきれないといった感じで、友だちとの話にも花を咲かせていた子どもたち。まず、吹き出し花火。みんなで見て「おお~すごいきれい~!」と近くで見る吹き出し花火の迫力に大盛り上がり!次に打ち上げ花火をみて「花火大会みたい!」とテンションもますます上がり、ついにひとりずつ手持ち花火をする時が来ました!保育者に手を添えられながら火をつけて、着火!勢いよく噴

き出すきれいな火花!そして次の瞬間!ポイっ…と花火から手を放す子ども…ん?手を放す子ども?「こわい~」あれ?今までのテンションはどこへ?といった感じで、身体をのけ反らしている子どもが数人。後で話を聞いてみると、お家で花火をしたことはあるけれど、一人で持っていたことがあまりなかった子どもが多いようで「きちんと棒の所を持ってたら大丈夫」と声を掛けながら、怖がる子どもは保育士と一緒に持って花火を楽しんだ子どもたちでした。いつもは元気過ぎるテンションの高い子どもたちも、いざ経験してみると意外と怖そうにしている姿とのギャップをこっそり見ていると、とても可愛かったです。写真は怖がりながらも楽しんでいる一枚。

この一泊保育「セツルの家」で普段できないような経験を味わうことができ、また一つ成長した子どもたちでした。

安立保育園 高松 大資



セツルの家！ 未来半世紀へとつなげよう！



セツルの家が琵琶湖に開設（1969年）してから約半世紀になりますが、この夏、数年ぶりに開設準備作業に参加させてもらって感動や感慨深いものを味わうことができました。半世紀の間にはいろんな変化（環境汚染や地球温暖化による気候変動や異常気象及び近々では新型コロナの出現による全世界的な規模の感染拡大）が生起していると思うタイミングで予期せぬ原稿依頼がありました。正直な気持ちをお伝えるチャンス을 いただいたと捉え執筆には全く自信がなかったが快諾してしまいました。

◀ 今年の開設準備に参加して思ったこと ▶ 1. 高校生（学童 OB）やボランティアが多数参加されていたことで、未来を切り開く青年が育っていることに感動しました。2. 高さのある飛び込み台が2台増設され4台になっていたことを確認できた喜び、そしてかつて台風のあおりで流されてしまったのを皆で引き戻したことがあったのを思い出しました。3. 浜辺に生き抜いた桜に変わって未来まで生き抜くべき盛り土された土壌のもと新しく若々しい桜が植樹されたことが確認できたことです。数年前に何とか老いた桜を生かしたいと宮川先生から（当時 長居保育園 園長）からご相談がありセメントを流し込んで応急処置をしたことを思い出しました。かつてセツルの家が開設38年目にして（2007年）地主（多胡氏）さんが不動産さんへ売却したことによって、閉設を余儀なくされたことを思うと、これから先、半世紀に渡って、このセツルの家を NPO 法人として絶対守り、ふるに子どもたちの自然体験の場として、また、夏期だけでなく職員研修等の利用を含め繋げていくことを通して自然環境を大切にしていかなければと痛感しました。それにはなにより育徳園法人の厚意と永岡教授の好意による寄付でセツルの家と隣接する土地（現在、駐車場を兼ねた広場）を取得することが出来たからです。今更のように感謝の念に溢れた次第です。NPO 法人大阪市地域福祉施設協議会として、この先50年、自然環境を守りつつ子どもたちにとっての学びとなる自然体験学習や遊びを継続していったと願う気持ちでいっぱいであることを申し上げて終えます。

— 追伸 — コロナ感染予防に留意しながら自然体験を保障された各施設の姿勢に敬意を表します。今川学園は、新型コロナ禍のもと感染予防の観点から、セツルの家利用辞退の決断を2年にわたって余儀なくされました。一日も早い終息を願うばかりです。



フェイス 上尾 明
（今川学園 前園長）

みんなのセツルの家

☆Children's voice☆



◎. **びっくり**したことはなんですか？

- 「暑いのに熱いカレーが出てきた」（2年）
- 「自動販売機の中にカエルがいた」（2年）
- 「部屋に砂がいっぱいあった」（4年）
- 「わかめ（？）のにおいがした」（4年）

◎. **最**高だったことはなんですか？

- 「琵琶湖で遊ぶ！」（1～6年）「枕ドッジ」（4年）
- 「釣りができた」「友だちの寝顔」「夜更かし」（6年）
- 「大人と笑い合いながら湖で泳いだこと」（5年）
- 「飛び込み台からの大ジャンプ！」（3年）

◎. **美**しいと感じたことはなんですか？

- 「魚の群れ」「朝陽」「たんぼ」「びわこ」（4年）
- 「琵琶湖に映る自分の顔」「夜の湖の景色」（6年）
- 「湖！・山！・自然！」（5年）

◎. **セ**ツルの家にこんなあったらいいな♡

- ウォータースライダー・露天風呂温泉
- バイキング・2段ベッド・クライミング
- 卓球台・湖の中に遊具・魚捕り網
- カヌー・屋根裏部屋



「私とセツルの家」

セツルの家の歴史を振り返って…

私がセツルの家に行くようになったのは、セツルの家開設当時（1969年）まもなくの頃からなので、もう50年以上になります。

当時は、江若鉄道の青柳浜駅があり裸電球が一個付いていた電信柱があるだけでした。リュックを背負い、満員電車の中でお互いにしがみつき合いながら乗って行きました。夜は真っ暗で、裸電球に沢山のカブトムシが集まってきたのを覚えています。

当時は、「ホテル」も大きな木に無数に光って、まるで夜空に輝くクリスマスツリーのようでした。今ではカブトムシは少なくなり、ホテルはまったく見られなくなったことはとても残念です。

台所では、井戸水をポンプで汲み上げ、おくどさん（かまど・へっついさん）があり、煙が充満する中でご飯を炊きました。部屋中に煙が広がると子どもたちに「早く浜へ出なさい」と、言ったものです。子どもたちは「わー煙いよー」と喜んで浜に逃げていました。五右衛門風呂の浮き板が浮き上がってきたり、窯に体が触れて熱かったりしたこともありました。

近隣の方との交流も懐かし思い出されます。セツルの家から見えるくらいの距離に牛小屋があって、搾りたての牛乳を飲ませてもらうこともありました。仔牛が生まれた知らせを聞いて皆で見に行き、一生懸命に立とうとする小さな仔牛に、「がんばーれ！がんばーれ！」と声援を送りました。

長い間保育園の給食を作ってくれていた私の母もセツルの家が好きでした。毎年一緒にキャンプに行ったのですが、その母が早朝に散歩をしていたら、浜辺で投網の漁をしている漁師さんが魚をたくさん分けてくれたので、皆で食べました。

あの時の、牛小屋の臭いと仔牛の澄んだ眼、魚の味、そして毎夏に訪れるといつも変わらず会えた人たちの笑顔は、ずっと忘れられません。

夜は満点の星、天の川に夏の大三角形がはっきり見えて織姫彦星の七夕の話を真剣に聞く子どもたちの姿を思い出します。満月の夜には、湖面にキラキラ映る月の道を見て感動を覚え、時間によって月の色が変わる事も知ることが出来ました。

セツルの家は私たちに、大阪では見ることの出来ない光景を見せてくれ、自然の中に包み込まれている心地よさを感じさせてくれました。

夏の始まりの開設準備では、トラックを借りて前日に「北市民館」に預かってもらっていた布団を引き取りに行き運びました。上げていた畳を敷き、家も周りの草を引き、障子の扉を琵琶湖で洗い障子を貼って、布団にシーツを掛け、ミシンを持ち込み枕カバーを縫うこともありました。飛び込み台も湖に設置し、ブイを張り遊泳場を整備しました。

現在は、井戸水のポンプが水道になり、かまどがプロパンガスになり、トイレもボットン便所から簡易水洗トイレになりシャワー室が増えて設備もどんどん良くなり便利になりました。

周りの環境は目まぐるしく変わりましたが、施設長も職員もボランティアも OB もみんなが一丸となって夏のキャンプのセツルの家で子どもたちが楽しく過ごせるように願い、自分自身も楽しんで働いている姿、ボランティア精神が受け継がれていることが嬉しく思います。

私は今年で 95 歳になりますが、セツルの家は私にとっていつまでも「第二のふるさと」です。セツルの家のことを心に思い浮かべると、生きる力とやる気が沸いてきます。

今川学園の三木達子先生、港隣保館の伊藤徳太郎先生、北田辺保育園の戸田圓八郎先生、愛染橋隣保館の菅良介先生、先人の方々が、縫い物や大工仕事をして、寝泊まりできるようにしてくださり、足りない備品は、ほとんどお金をかけないで物を持ち寄って整えてくださいました。多くの方々の手によって、セツルの家が出来上がっていきました。物を大切にする精神、自ら率先して共同作業をする姿、何よりも、人とのつながりを大切にされる先生方を身近で見せて頂き学ばせて頂いた時間は、私の財産になりました。

どんなに時代が変わろうとも私たちが忘れてはいけない大地協の原点がセツルの家に詰まっています。これから引き継いでいかれる若い方々が、この思いを将来に繋いで、大阪のセツルメントの活動を続けていってほしいと思います。

長居保育園 理事長 宮川 ヒサ